

次の文章は、行為における**身体の独自性**について論じたものである（ただし、一部省略した箇所がある）。これを読んで、後の設問に答えよ。

身体の独自性について不用意に答えるならば、次のような答えが返ってくるかもしれない。――私の身体は私の意志に従う。**しかし**自分の身体以外の物体はそうではない。私は自由に手を動かすことができる。**しかし**目の前の机や本はそうではない。

だが「私の身体は私の意志に従う」とは意味不明でしかない。いったい、身体が何に従うというのだろうか。^{*}アンスコムは、**こうした常識的見解を次のようにきわめて鋭く批判している。**

意志の作用によって腕を動かすことはできるがマッチ箱を動かすことはできない、と言われることがある。**だが**、もしその発言で「マッチ箱を動かそう」と意志しても、マッチ箱は動かない」ということを意味しているのならば、答えはこうだ。「マッチ箱を動かそう」と意志したのと同じように、腕を動かそうと意志しても、腕もやはり動きはしない」。あるいはその発言で「私は腕を動かすことはできるが、マッチ箱を動かすことはできない」ということを意味しているのならば、答えはこうなる。「私はマッチ箱を動かすこともできる。――こんな簡単なことではない」

意志することが何かを念じることだとするならば、もちろん、念力でもなかぎり「マッチ箱を動かそう」と念じただけでマッチ箱は動きはしない。**しかし**、まったく同様に、腕を見つめて「腕よ動け!」といくら念じても、私の腕はびくりとも動かないのである。**他方**、実際に腕を動かしてみせるというのならば、私はマッチ箱のことも動かしてみせる。机の右? よろしい。左? 造作もない。マッチ箱はまさに私の「意のままに」動くのである。

もちろん、私の意のままには動かないものも多くある。**たとえば**私は東京タワーを動かすことはできない。**しかし**、私は自分の耳を動かすこともできはしない。身体の中の多くの部分もまた、私の意のままにはならないだろう。

「意のままになる」という観点から見るときに、いったい私の身体と身体ならざるものたちとはどう違うのか。それは一見してそう思われるのに反して、実はいささか違いはしないのである。

アンスコムがこのシデキは、**「意志作用」**なるもののクウキヨミをみごとに示している。**だが**、それでもなお、身体とマッチ箱がまったく同等に扱われてしまうならば、それもまたアヤマリと言わざるをえない。身体とマッチ箱とはどこか異なる身分をもっているはずである。

では、それは何か。

われわれがアンスコムに議論に感じる最大の「ずるさ」は、彼女がマッチ箱を動かしてみせるところにある。アンスコムは目の前のマッチ箱を無造作に「つまんでひよいと動かす。そして彼女は言う、^{*}nothing easier!」しかし、「つまんで動かす」というのはインチキではないだろうか。いや、別にインチキではないが、まさにここにポイントがある。

私はマッチ箱を動かすこと**において**私の腕や指を動かしている。すべての意図的行為は、そこにおいてなんらかの身体動作を含んでいる。私は、この点に**身体動作の独自性**を見いだす。

私が何かを意図し、その意図の実現について考慮し、調整・制御している場面では、**むしろ身体動作は意識されないだろう**。私はけつしてまず身体動作を制御し、それによつて歩いたり自転車に乗ったりするのはない。私は周囲のようすに意識を向けながら、歩調を変えたりハンドルを切ったりする。**そこで**はむしろ**身体動作は「透明化」**している。

これに関連して興味深いのが「**熟達**」ということである。**たとえば**、「変化球を投げる」という事例を考えてみよう。初心者には、まずボールの握り方、手首のひねり方、投球のフォーム等々を分解して教わり、それらをいちいち**意図的に**なぞりながら、全体として変化球の投球を試みるだろう。そのような場合には、その人はかくかくにボールを握り、しかじかに手首をひねり等々をなすことによつて、変化球を投げる。**しかし**、この**「によつて」**関係は初心者を記述する仕方であり、熟達者はもはやそのように記述されるべきではない。熟達者は**端的に**「変化球を投げる」のであり、そのとき自分がどのようにボールを握り、どのようにひねっているのかはむしろ**自覚されないだろう**。**しかし**もちろん、彼は変化球を投げることに**おいて**、特定の仕方でボールを握り、手首をひねっているのである。**このように**、初心者**を記述する場合と熟達者を記述す**

る場合とでは、その記述の仕方は異なり、そのもつとも大きな違いは、「によつて」の関係から「において」の関係へと移行する点にある。

そして、「において」の関係に移行するということは、広い意味においてそれが身体性を**o**びることであると言える**だろう**。それゆえ、熟達の場合が増せば増すほど、一般に身体は延長されていくのである。逆に、熟達の場合が減すれば、身体はふだんのこの五体よりも縮小されることになる。*リハビリテーションの場面などはそうしたケースにほかならない。

身体**の独自性**は、なによりもまずそれが意図的行為において透明であるという点に存している。身体動作そのものが意図的になされる場合、たとえばリハビリテーションにおいて意図的に腕を上げるような場合には、なるほど身体動作が意識的になされ、ふだん透明なその姿が不透明に現れてくる**だろう**。**か**し、身体は**そうして姿を現すこと**によつて、かえつてマツチ箱と同じ身分になる。リハビリテーションにおいて私は、マツチ箱を動かすようにして、いや、マツチ箱よりも意のままにならないものとして、この腕をもち上げるのである。

だが、透明なものとしてピカえているというだけでは、行為における身体の重要性はまだ浮かび上がってこない。ここで、行為における身体**のあり方に重要な光を当てるもうひとつのポイントが、「責任」という観点である。**^④「責任」の名のもとに、透明であつた身体はその姿を浮上させるのである。

私が友人に挨拶しようとしてタクシーを停めてしまつたという場面を考えよう。私は友人に挨拶すること**（において）**手を上げた。そして手を上げること**（によつて）**タクシーに合図をした。そしてその結果、私は意図せずして停めてしまつたタクシーの運転手に**わびる**。と**いうこと**は、すべての意図的行為には身体動作が含まれているのであるから、さらにその身体動作から生成される行為はすべて私の責任の範囲**という**ことになる。虫を追い払おうとして私は腕を振る。そして腕を振つたことによつて隣の人をぶつてしまつたならば、私はそれに責任をとらなければならない。意図的行為において身体動作がなされ、その身体動作が意図せぬ結果を引き起こすとき、この「において」の関係と「によつて」の関係の折り返し点として、身体は不透明化する**だろう**。しかも、この不透明化の仕方は初心者やリハビリテーションの場合の不透明化とはまったく異なっている。**こうして、多くの責任が身体動作を経由して発生し、「において」の行為生成の方向が「によつて」の方向へと折り返す独特な地点とし**

て、透明化していた身体が立ち現れる。われわれは、まさに「身体を張つて」行為するのである。

〔注〕 アンスコム：イギリスの哲学者（一九一九―二〇〇一）。

nothing easier...こんな易しいことはない、の意。

リハビリテーション：事故や病氣などで障害を負つた人の心身を回復させるための治療や訓練。

〔野矢茂樹「哲学・航海日誌」による〕

問一 ――線 a―e の漢字と同じ漢字を含むものを次の各群の **ア** から一つずつ選び、記号で答えよ。

a シテキ					b クウキョ					c アヤマリ					d オびる				
ア	スイテキが落ちる。	イ	テキカクな指示。	ウ	汚職をテキハツする。	エ	テキタイする勢力。	オ	テキオウ能力が高い。	ア	キヨギの証言。	イ	キヨダクを得る。	ウ	キヨドウに注意する。	エ	キヨマンの富。	オ	キヨシユウを決めかねる。
ア	ソウゴに助け合う。	イ	事実をゴニンする。	ウ	人権をヨウゴする。	エ	イゴを楽しむ。	オ	カクゴを決める。	ア	ニンタイ強い性格。	イ	道路がジュウタイする。	ウ	タイダな生活。	エ	教室でタイキする。	オ	ネットタイの植物。
〔		〔		〔		〔		〔		〔		〔		〔		〔		〔	

e ヒカえて
 ア コウダイに名を残す。
 イ 社会にコウケンする。
 ウ 身柄をコウソクする。
 エ 経費をコウジョする。
 オ 任務をスイコウする。

〔 〕

問二

——線①「私の身体は私の意志に従う」とは意味不明でしかない」とあるが、それはなぜか。その理由を述べたものとして最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 私の身体が私の意志に従うという考えは、私と私の身体を分けて考えているが、私と私の身体を分けることは不可能であり、そうである以上両者を別々に考えるのは無意味だから。

イ たとえ私の身体であっても、頭の中で動かそうと意志するだけでは動かず、耳などのように意志の自由にならない部分もあり、単純に自分の身体が自分の意志に従うとはいえないから。

ウ 意志することは何かを念じるということであり、念じることによつて身体のみならずマッチ箱などを動かすことができるとしても、それは特別な場合であり、普遍化することはできないから。

エ マッチ箱を動かす身体動作において、私は私の意志で腕を動かし、その結果、造作もなくマッチ箱を動かすこともできるが、そうしたことは普段我々が一般的に行っているあまりにも普通のことだから。

オ マッチ箱を動かす場合などは、私の身体は私の意志に従うといっているのだが、どんなに私の身体を使ったとしても、たとえば東京タワーのように私の意のままには動かないものも多くあるから。

〔 〕

問三

——線②「そこではむしろ身体動作は『透明化』している」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア たとえば野球の初心者のように、人間が何かを意図し、その意図の実現のために身体動作を調整・制御しようとするとき、身体が強く意

識されるということ。

イ 人間は歩いたり自転車に乗ったりするとき、同時に別の動作を試みることもあるが、その別の動作はつねに意識的に調整・制御されるということ。

ウ 人間が何かをしようと思つてその意図を身体動作に移す場合、その動き自体は外から見えるが、動作の根本にある人間の意図は目に見えないということ。

エ 何かをしようと意図して身体を動かす場合でも、その意図の実現のために自分自身の身体を動かすことについてはさほど意識されないということ。

オ たとえばマッチ箱を動かそうとして、その意図の実現のために腕や指を使ったとしても、結果として身体動作はその形跡を残さないということ。

〔 〕

問四

——線③「『によつて』の関係から『において』の関係へと移行する」とあるが、その具体例として適当でないものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 料理の経験がない人は、包丁を扱うときも、危険のないように意識しつつ切るが、熟達した料理人になると、手の一部のように包丁を使うようになる。

イ 水泳を習い始めた人は、自分の腕や足を教えられたとおりに動かそうとするが、泳ぎなれてくると、さほど手足の動きを気にせずに泳ぐようになる。

ウ 車の運転歴が短い人は、標識や対向車の動きなど、様々なことに一度に気を配ろうとするが、運転歴が長くなると、さほど意識せずにそれらの情報を得つつ運転できる。

エ 運動不足解消のためにジョギングを始めたばかりの人は、運動後に筋肉の凝りや疲労を強く感じるが、毎日走りつづけると、しだいにそれを意識しなくなる。

オ 箸を使い慣れていない人は、苦勞して意識的に食べ物をつかもうとす

るが、使いなれてくると、ほとんど箸で食べていることを気にしないようになる。

問五 — 線④「責任」の名のもとに、透明であった身体はその姿を浮上させるのである」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 自分の行為における動作が意図せぬ結果を引き起こした場合、「意のままに」ならない身体の不自由さが自覚されて、身体動作がはっきり姿を現すということ。

イ 自分の身体の透明化は、無意識の行為においてのみ生じるものである。その行為者である自分が責任を自覚する意図的な行為においては、身体は常に不透明な姿で現れるということ。

ウ 自分の行為における動作が意図せぬ結果を引き起こした場合、自分に責任はないが、他人から見れば責任があるので、自分の意志の有無とは無関係に身体が意識されるようになるということ。

エ 自分の身体動作において、自分がその動作の意図をはっきりと意識している場合には、その動作をなすことの意義や責任といったものが明らかになり、その意味で身体が姿を現すということ。

オ 自分の行為における動作が意図せぬ結果を引き起こして、他人に影響を及ぼした場合、その結果を招いた要因として自分の身体動作が意識され、その自覚を通して身体がはっきり姿を現すということ。

問六 本文の趣旨に合致するものを次のア～カから二つ選び、記号で答えよ。

ア アンスコムの議論の進め方で最も巧妙なところは、彼女がマッチ箱を「つまんで動かす」という段階を故意に無視している点にある。

すなわち、彼女が実際に動かしているのは彼女の腕や指といった身体であるにもかかわらず、マッチ箱が動いたという点だけを結果として示しているのである。

イ 「によって」の関係から「において」の関係へと移行するとき、身

体は不透明なものとして浮かび上がる。なぜなら、意図的行為をなす場合に、行為の主体者は常に自らの行為の目的を明確に把握し、それを実行するために自らの身体を強く意識し始めるからである。

ウ 何か意図したことを実現しようとして具体的に行動する場合、身体動作が透明化する程度は、身体の延長と縮小とに呼応している。

透明化の度合いが進めばそれだけ身体は延長され、逆に不透明化の度合いが進めばそれだけ身体は縮小されるという関係にある。

エ 何かをしようと思つて身体を動かす場合、その動き自体は目に見えたとしても、行為者の意図は目に見えない。しかし、あらゆる身体動作は行為者の意図に基づいてなされるものだから、身体動作は行為者の意図を具体化するものであり、行為者の意識・無意識に関係なくその身体は不透明化する。

オ 身体と身体ならざるものとは、意のままになるか、ならないかという点で違いがあるが、結局は、両方ともに意志だけでは動かない。ものを動かすことができない意志の限界を指摘するアンスコムの議論は、その点で意志作用による説明の不確かさを示している。

カ マッチ箱を動かす場合に身体を使っていることを無視している点は、アンスコムの議論の「ずるさ」であり、それは人間の行為の根底には身体動作があることを暗示している。つまり、意図的な身体動作があらゆる行為の前提になる点に、身体行為の独自性がある。